

はじめに——問題点の提示——

『方丈記』は、八千八百八十字余り、四百字詰原稿用紙に換算して二十枚程の作品である。成立は、跋文の「于時、建暦ノ二年弥生ノ晦日頃、桑門ノ蓮胤、外山ノ庵ニシテ、是ヲ記ス。」⁽¹⁾（太文字は、筆者に依る。以下同じ。）に拠れば、建暦二年（一二二二）三月末日頃となる。建長四年（一二五二）成立の『十訓抄』は、『方丈記』について

方丈記とて、仮名にて書き置けるものを見れば、はじめの詞に、

行く水の流れば絶えずして、しかもとの水にあらず

とあるこそ、

世間人而為_レ世 人苒々行暮

河関水而為_レ河 水滔々日度

といふ文を書けるよ、とおぼえて、いとあはれなれ。⁽²⁾

と、記している。これは、『方丈記』冒頭文の典拠を示したものであり、「いとあはれ」は評釈となろう。『方丈記』の作品研究は、『十訓抄』から始まったと言えよう。

『十訓抄』の成立から現在まで七百六十余年が経過している。『方丈記』は作者名の問題も含め、未だに解釈・

理解の相違を多々抱える作品である。作者名は、跋文の「蓮胤」を重視するならば法名である蓮胤であるのだが、俗名である鴨長明を使用する研究者も多い。作者名の相違は、作者を仏者と捉えるか否かということに繋がる。この相違は、作者の有する仏教の知識の多寡、深淺の問題と関わるため、作品細部の解釈にまで影響を及ぼすものとする。作者名を蓮胤と見る者は『方丈記』を仏教文学と捉え、鴨長明と見る者は随筆と捉える傾向が強い。また『方丈記』の場合、作品の性質の捉え方の違いが、作者像の形成にも反映しているのではなからうか。『方丈記』の研究では、まず作品の作者像をどう見るかの問題がある。

現在『方丈記』研究は、広本系古本に分類される大福光寺本を使用するのが通例となっている。これは、大福光寺本が現存する最古の伝本であり、最善本と見られているからである。広本系に対して、前半部の五大災害の記事を欠く略本系の伝本が三種類存在する。略本を作者の手に成るものと見るか否かと、三種類の伝本の成立順においては意見が分かれている。

大福光寺本は最善本とされているが、作者自筆本と認める根拠はない。速筆で書写されていることより、誤写が存在する可能性は高い。特に、大福光寺本の独自本文には注意が必要であろう。

『方丈記』という題名から考えるに、これは、方丈の栖についての記」という側面を有する作品と捉えられよう。事実、『方丈記』後半には方丈の庵での生活が記されている。このことより、『方丈記』を「記」体に分類し、この方面から考察を試みた説がある。また、随筆という面から考察を試みた説もある。「記」体や随筆という面から考察を試みた場合、作品に表出された仏教思想をどのように捉えればよいのだろうか。

『方丈記』の思想的側面をどう見るかの問題も、作品理解上の重要な課題である。草庵内部の記述には「北二寄セテ障子ヲ隔テ、阿弥陀ノ絵像ヲ安置シ、傍ニ普賢ヲ掛キ、前ニ法花経ヲ置ケリ。」とあり、作品も阿弥陀仏の名号を唱える場面で終わっている。これらのことより、ここには天台浄土教の思想の表出が認められている。また、序章に「其ノ主ト栖ト無常ヲ争フ様、イハハ、朝顔ノ露ニ異ナラズ。」とある如く、中心的思想は無常思想であると見るのが一般的である。また、『方丈記』に『往生要集』の影響をみる説や『方丈記』の『維摩経』依拠説も提出されている。更に、浄土教思想については、天台浄土教の思想を元として、その上に法然義の思想の表出まで見る説も提起されている。一方、古注の『方丈記抄』が「人間の実有の相に着して常見をおこす。諸法は空なりとしらせんが為也。」³⁾と指摘する如く、空の思想の表出を見る説も古くから存在する。なお、卑見では、作者の有する仏教の知識を考えると、『方丈記』には天台教学の三諦説が表出されていると見る。

序章に表出する仏教の思想が、序章にだけ認められるものなのか、作品前半、更には全体を通してのものなのかについても意見は分かれる。序章に表出された思想が終章にも見られるとするならば、両者は対応している可能性が出てくる。この対応が執筆当初からのものだとするならば、『方丈記』は随感随想的に記されたものではなく、統一的な構想を有する作品であることになる。

思想の表出という点で言うならば、方丈の草庵の生活の基盤を老荘思想に求める説もある。この説を採る者は、作者を文人的隠遁者とし、作品を随筆と捉える傾向が強いようである。

これらの諸思想の、『方丈記』構成にかかわる実態を究明するという課題が問われているのである。『方丈記』前半部は「余、モノ、心ヲ知レリシヨリ、四十余リノ春秋ヲ送レル間ニ、世ノ不思議ヲ見ル事、ヤ、度々ニナリヌ。」と書き出した後、五つの災害記事が続く。安元の大火、治承の辻風、福原遷都、養和の飢饉、元暦の大地震と称されるものである。作品の構成から見て、五つの災害は「世ノ不思議」の具体例となるのだが、災害は「世ノ不思議」の範疇に属するもののだろうか。

父の死去から作者の和歌が入集した『千載集』の成立の間は、作者の不遇の時代と見られている。五つの災害は、総てこの時期に発生したものである。作者が不遇の時代より五つの災害を選出したことには、特別な意味があるのではなからうか。また、「四大種ノ中ニ水・火・風ハ常ニ害ヲナセド、大地ニイタリテハ異ナル変ヲナサズ。」とあることより、作者は災害の原因を仏教でいう物質を作り上げる元素である四大種の異変に求めている。福原遷都は、四大種の異変には当てはまらない。そこで、福原遷都の記事は当初の構想には含まれておらず、後に挿入されたものと見るのが一般である。なぜ、当初の構想に含まれなかった福原遷都を災害記事の中に挿入させたのだろうか。また、他の四つの災害は自然災害という要素を有しているが、人為を原因とする福原遷都はこれにも当てはまらず、読み手は不自然な印象を抱くのではなからうか。更に、前半部の後半には「所ニヨリ、身ノ程ニ従ヒツ、心ヲ悩マス事ハ、拳ゲテ不可計。」と、五つの災害記事とは異なる記述がなされている。前半部における前半と後半の内容は、どのように関連するのだろうか。

前半部の災害記事は、当時の日記類によって裏付けられる記述もあるが、一致しないものもある。一致しないものについては、作者の記憶違いではなく、虚構と考えるべきではないのか。後半部に記される方丈の草庵は閑寂な場所に位置している如くに記されているが、日野は日野氏の本拠地であり、日野山の麓には法界寺という大寺院が存在していた。法界寺には都からの参拝者も多く、周囲には遁世者たちの草庵も存在したようである。かくの如き日野の状況は、作品には記されていない。これも、虚構と言ってよいのではないか。また、『方丈記』に登場する「余（我）」という人物は、作者そのものなのだろうか。この人物は、作者を雛型として創作された作品主人公と見るべきなのではあるまいか。⁽⁴⁾

また、方丈の草庵は、仏堂の機能を有するものとして描かれているのではないか。草庵は生活の場としてだけでなく、周囲の環境と共に仏道修行の場であったと考えられるのではないか。このことを述べるためには、草庵での生活の記述が、仏教の教義に適合しているか否かを検証する必要がある。また、和歌・管絃の記述も改めて検討が必要とならう。和歌を詠じ管絃を奏することも、仏道修行の一環とみる思想と作者の草庵の生活の実態との関連を更に究明する必要があると考える。

『方丈記』終章の理解の仕方には、この作品の理解のための諸問題が総括的に示されているように思われる。主人公は庵の生活を、「夫、三界ハ只心一ツナリ。」という言葉によって正当化するが、終章では一転して庵の生活に反省を加える。これは、庵の生活に執着心を抱いたことへの懺悔であろう。そして、終章は、主人公が仏教における懺法を修している場面を記したものと考えるべきではあるまいか。最後に、主人公は阿弥陀仏の名号を唱えて筆を擱く。この念仏を唱えた時、主人公の執着心は解消されたのだろうか。

「不請阿弥陀仏（不請の念仏）⁽⁵⁾」は、作品中、最も難解な言葉とされている。今では採用されていないものをも含めると、語釈は十一種類に分類できる。この中で、最も妥当性のあるものはどれなのだろうか。文法の面からも、考察する必要がある。

評釈に至っては九十種類以上の説がある。このように評釈が多岐にわたるのは、「不請阿弥陀仏（不請の念仏）」という言葉が、他に用例を見出せないことも理由の一つとして考えられよう。研究史的に見れば、流布本系本文である「不請の念仏」の語釈が、大福光寺本の本文である「不請阿弥陀仏」に通用されたことも一因ではなからうか。この通用は、妥当なのであろうか。

終章における主人公の自問自答の叙述の中で、自答相当部と「不請阿弥陀仏」との関連の実態をどのように見るのが至当であるのか、より深く探求していきたい。

本書は、以上の点を鑑みて『方丈記』の考察を試みるものである。

注

- (1) 『方丈記』の引用は、大福光寺本『方丈記』（校異・鈴木知太郎 一九五九年 武蔵野書院）に拠り、適宜、句読点、濁点を付し、仮名を漢字に改めた。
- (2) 『十訓抄』の引用は、『十訓抄』（校注・訳者・浅見和彦 新編日本古典文学全集『十訓抄』一九九七年 小学館 三八一頁）に拠る。
- (3) 『方丈記抄』（著者・加藤磐斎 一六六〇年以前に成立。）の引用は、『長明方丈記抄』（編修・有吉保 加藤磐斎 古注釈集成『長明方丈記抄・徒然草抄』一九八五年 新典社 一四頁、一五頁）に拠る。
- (4) このような立場を採る者に、今成元昭氏（『鴨長明——方丈記を中心に——』『中世文学』一九七五年九月 二三頁）、築瀬一雄氏（『古典を読む——方丈記』一九八一年 大修館書店 二二八頁）などがある。
- (5) 流布本系本文。